

友と紡ぐ物語

紅蓮帝王獄炎烈火霸王エル・ドラー
ド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人と人が互いに武器を持つ、魔法を使うなどで戦う。これはこの世界では普通である。

互いが意見を通すため、戦いで決着をつけることを『決闘』と呼び

互いの組織が、自分たちこそ正しいのだと示すための『戦争』と呼ぶ

世は戦いにあふれている。

そんな世界で戦いを嫌う一人の少年、名を入江 桜（いりえ さくら）。

そんな桜が出会った、有村 紅（ありむら べに）。

これは、人と人が繋がり、そして戦う物語。

目次

1話	それは、一つの出会い	1
2話	一つの申し出	6

1話 それは、一つの出会い

『おはよう』

俺は母さんにそう告げた。

『あら、おはよう。朝ごはん作ってあるから食べちゃって。私はもう出るから』

母さんは俺にそう言った。最近忙しいのか、俺が起きたころにはもう家を出る手前だ。

『今日も帰りが遅くなるのよ。お金置いておくから、これで適当に食べておいて。』

そう言つて10000札を俺に渡すと、母さんは慌ただしく玄関へ向かった。

『行つてらっしゃい。お仕事頑張つてね。』

そう俺が言つと、母さんは笑顔で『ありがとう』と言つて家を出た。

俺もご飯を食べて学校へ行こう。そう思つて食卓に戻る。

テーブルの上にはわかめと豆腐の入った味噌汁と白いご飯が置かれていた。

『いただきます。』

俺は誰もいない家の中で、一人朝食を食べた。

『ごちそう様。そろそろ学校行かなきゃだな。』

時計は7時半を示していた。学校についてからやることもあるから、少し早めに出よう。

俺は足早に学校へ向かっていった。

今日は日直を任されている。早めに行つて朝の仕事を片付けなきゃいけない。

『決闘だ!!決闘しやがれ!!!』

近くの公園でそんな声が聞こえた。

この世界には武器を持つ人、魔法を使う人が幾千といる。そんな奴らが互いに戦うことを『決闘』なんて呼んでいる。

これは不思議なことじゃない。いろいろなところでよく見る光景、それだけ当たり前の光景なんだ。

その決闘に興味を持ち、人が何人も公園のほうに足を運んでいく。

俺はその決闘は見に行かず、学校へと向かった。

俺は決闘が嫌いなんだ。

学校に着き、職員室へ向かう。朝の仕事は、日直当番が書くその日のクラスの様子をまとめる日誌を受け取りに行くだけだ。

『すみません。入江です。日誌を受け取りに来ました。』

俺が職員室でそう言うと、すぐに眼鏡をかけた担任の先生が渡しに来てくれた。

『今日は入江君でしたか。はい、これ日誌です。ちゃんと書いてくださいね。』

そう言つて進藤先生は日誌を渡してくれた。

『ありがとうございます。進藤先生。失礼します。』

そう言つて俺は職員室を出る。

自分のクラスに向かおうと2階への階段に足をかけたとき、後ろから声をかけられた。

『少しいいかな。そこの君。』

その呼びかけに、少しなれなれしく感じながら応じる。

『はい。何でしょうか?』

振り向くと同時に、少しおどろいた。

そこに立っている人は、俺から見ても綺麗に映ったからだ。

『ああ、急にごめんね?道を尋ねたくて...』

そう言っつてその人は頭を掻いていた。困り気味に笑う顔を見て改めて感じた。

とても可愛らしい、と。

『い、いえ、大丈夫です。それで、どこを探しているのでしょうか。』

緊張からか少し上ずった声で返答してしまい、少しだけ恥ずかしく感じながらも詳細を聞く。

『職員室を探していてね。何分始めて来たから場所がよくわからなくてね……』

そう言った。その人は相変わらず困り気味に笑っていた。

始めて、ということとは転校生か何かだろうか。

『そういうことでしたら、案内しますよ。困ってるみたいですし。』

そういうと目の前の彼女は花が咲くかの如く、満面の笑みを浮かべた。

『ありがとう!! たまたまとはいえ、君に出会えてよかった。』

そう言ってもらえると嬉しい反面、少し照れ臭くも感じた。

その言葉に『気にしないでください。』と返す。

『いやあ、幸先のいい出会いができたよ。私は紅。有村（ありむら） 紅（べに）という。

君はなんて言うんだい?』

紅…… 髪の色とは真逆の色だな、なんてことを思いながら返答する。

『俺は入江 桜（いりえ さくら）。よろしく。有村さん』

この出会いが、俺のこれからを良くも悪くも刺激的にするとは思っていなかった……

2話 1つの申し出

『俺は入江 桜（いりえ さくら）。よろしく。有村さん』

そう自分の名前を名乗る俺の前に、有村さんは先ほどのように微笑んだ。

『桜君というのか！良い名前だな。』

そんなことを言いながら彼女は俺の名前を褒めてくれた。

女のような名前で好きな名前ではなかったのだが、こう褒められると悪い気分ではない。

『ありがとうございます。それで、職員室でしたね。案内するのでついてきてください。』

幸いこの学校の職員室は一階にある。自分も先ほど行ったばかりだし、そんなに距離はない。

『おおーありがとうございます!!このお礼はそのうちさせてもらおう。ところで、少し聞きたいことがあるのだが、良いかな?』

そんなことを言いながら、有村さんは問いかけてきた。

『桜君。唐突で申し訳ないのだが…』

その言葉は、この世界ではよくあることで

『学校をわりに、私と…』

その申し出は、普段から聞きなれているものだった。

『『決闘』をしないだろうか』

そんな、戦いの申し出だった。

『突然どうしたんですか？決闘だなんて…』

唐突で驚いた。まあ、受ける気はないが、理由くらいは聞いてみる。

『なに、大した理由はない。せっかくなので決闘を通して仲良くなれば、といったところだ。』

確かに、昔の不良漫画のように戦って仲良くなる。といった話は聞く。

だが、俺は『決闘』というものが嫌いなのだ。だから、この申し出は断らせてもらおう。

『申し訳ないですが、お断りさせていただきます。』

『そうか。まあ急なことだったからな。突然こんなことを言つてすまない。』

そういつた彼女は、少し悲しそうな顔をしていた。

『あつ、ここが職員室です。』

程なくして職員室の前までついた。

『ああ！礼を言おう桜君。ありがとう！』

そう言つてから彼女は職員室に入つていった。

案内をしているうちに結構時間がたつてしまったようだ。まだ時間はあるが、教室へ向かおう。

教室に入るとすでに何人かの生徒がすでに教室内で談笑していた。

自分の席に着いたところで、一人の男が話しかけてきた。

『よお！おはよう、桜!!』

そんな挨拶とともに、俺と8年の付き合いになる友人、『四宮 鍵（しのみや けん）』が席の前までやってきた。

『おはよう、鍵。なんか用か?』

『冷たいこと言うなよ。僕とお前はもう8年の付き合いになるんだぜ?ただの雑談だよ。話そうぜ?』

そう言っつて鍵はにこにこ笑っている。まだ時間もあるし、俺も暇を持て余すところだったから応じよう。

『わかったよ。わざわざそんな風にいうなら、何か面白い話題でもあるのか?』

『ああ!とつておきの話題だ!!実は昨日、女の子を拾ったんだ!!金髪の!』

.....
少し、理解に時間がかかった。何を言ってるんだ?女の子を?拾った?

『何を言ってるんだ？変なものでも食ったか？』

『いや、そんなんじゃないさ。僕はただ、明確に、事実を伝えているだけだ!!!』

こういつたふざけた話を、こいつは結構するんだ。だが、それにしても主張してくる。

『そうなのか。それは一大事だな。どういう経緯かわからないけど、がんばれ』

『驚くくらい雑だな!!まあいいや、頑張るよ。あ、そういえば昨日のあのテレビ番組見たかー?』

適当にあしらったらほかの話題になった。やっぱ冗談だったのか。

そこからは、他愛のない雑談をして朝を過ごした。

『朝のHR始めるぞー。』

そんな進藤先生の言葉で、朝のHR（ホームルーム）は始まった

『えー、突然ですが、今日はこのクラスに新しい仲間が加わります。』

その言葉にクラスのテンションは燃え上がった。

転校生、おそらく朝倉さんのことだろう。

『はい、静かにしてください。進みませんので』

その言葉で、少しではあるがクラスは静まった。まあ、すぐ騒がしくなると思うが。

『それでは入ってきてくださいーい』

そんな先生の言葉を合図にドアが開かれ、彼女が姿を現した。

白い髪をなびかせ、堂々と歩くその姿はとても凛々しいものだった。

そして、彼女は大きく声を上げこう言った。

『初めまして！私は有村 紅という!!みんな、仲良くしてくれ!!!
!!!』

その挨拶はとても堂々としていて、それでいて元気を感ずるものだった。